弥生人物誌 (三)

日本酪農の先覚者　出納陽一先生

古藤田　太
(会員・弥生町江良)

弥生町を構成している昔の上野村、その上野村の出納家は佐伯地方に於ては古くからの名門である。

先祖は中世佐伯氏の家臣で、徳川時代にあっては上野村の大庄屋家として続いてきた家柄であった。隣村の切畑、大坂本の大庄屋家も、上野村出納家の庶流にあたるものゝようである。

この名門、出納家の出である出納陽一は、上野村初代村長出納穂佑の長男として、明治二十三年九月、上野村上小倉に生れ、大正二年、札幌農科大学畜産科に入学した。

卒業すると、東京板橋にあった愛光舎牧場に就職したが、二年後、酪農界の重鎮宇都宮仙太郎の娘琴子と結婚した。

出納陽一は熱心なクリスチャンであった。陽一が、何時頃キリスト教徒となったかは定かでない。然し、早くから札幌基督教会の応援米国宣教師、ジョージ、エム、ローランド師を慕い、又教えをうけていたことから若くしてキリスト教を信仰するようになっていたと思われる。琴子夫人ともどもクリスチャンであったようだ。

またローランド師の外、出納陽一の人生に大きな影響を与えたものは、妻の父、宇都宮仙太郎であった。

大正年代、デンマーク農業は世界で最も進歩し、理想的な先進国として我が国の識者に知られ、その酪農事業や、協同組合組織は高く評価されていた。又国民教育の普及度も称讃の的であった。

この頃、仙太郎翁は、若い陽一夫妻に北海道の将来に対する希望と期待をかけた。彼が米国留学中学んだこと、「数度の戦争に敗れ、残された荒れた耕地を酪農によっ

て立派に蘇生させたデンマークの三愛主義即ち、人を愛し、神を愛し、且つ又土を愛す」その三愛主義の発祥地デンマークに陽一夫妻を派遣し、身を以て学ばしめたいという考え方をもっていたことや、信仰の師、ローランド師にもデンマーク行きを熱心にすゝめられたこともあって、未だ資力の無かった陽一は仙太郎の私費にすがって、大正十年（一九二一）デンマークに夫妻揃って渡ったのである。

余談になるが、仙太郎翁は陽一夫妻ばかりでなく、翌年には宮尾北海道庁長官を動かして、道庁より三名、民間人から深沢吉平をデンマーク派遣することに尽力する等、我が国酪農界草分けの人であった。

陽一夫妻は、デンマーク農業の実態や、有名なデンマークの国民高等学校をも三ケ年にわたって研究され、日本酪農界の先駆者たらんと大いなる夢を抱いて大正十三年（一九二四）帰朝した。

陽一は帰朝後、早速札幌郡白石村字野津幌に農場を開設した。この出納農場は、牛舎や、住宅だけでなく「チーズ」を造ることを目的とする製酪所が附設された好都合なものであった。

その製酪室を、仙太郎翁の肝煎りで、陽一から借り受けた藤田・中島・徳田といった人達や、後年雪印乳業の重鎮となった佐藤相談役等が、やがてここで「バター」製造を始めた。これは大正十四年（一九二五）頃のことであろうか。

またこの頃、北海道ではデンマーク人「ラーセンス・フェンガー」やドイツ人「コッホ」といった人々が全く異なる国情のもとで、農業に取り組み、営々と努力していた。

陽一はこの真の姿を紹介したり、解説したりして先進国農法の普及に努力した。又自らも立上って酪農村生活の在り方、農民教育の実践に深い熱意を傾けて、あの温かい人柄の陽一は希望に満ちたまなざしで酪農事業を語り続けたのである。

この出納農場は、昭和十二年、雪印乳業の前身である北海道製酪販売組合連合会に譲渡された。その後の陽一は堂々たる体躯に微笑をわすれず酪農の普及改善と指導に明け暮れた。この頃のことであろうか。「頭のボタンを押すと智恵が出る」という陽一の言葉が流行した。

その仕事は主として、牧草飼料作物や、蔬菜類の品種

改良、諸外国より導入品種の能力検定、その栽培利用法の研究、乳牛・肉牛・豚・鶏などの家畜配合飼料の試験農場として、我が国の酪農畜産に幾多の貢献をしたのである。このように、創設期の雪印乳業に対する出納陽一の協力は極めて大きな力となったと、当時の関係者は語っている。

昭和十六年一月、陽一は満州拓殖公社より北海道農法の権威として「参与」という高い地位で招請された。

陽一は満州の大地に酪農の夢をもって渡満し、開拓や、酪農の指導に当った。然し、夢破れて終戦を迎え、昭和

出納陽一先生

二十一年八月帰国した。

敗戦日本のあの混乱の中にあって、日本の復興は酪農からと活躍を続けたが、昭和二十八年以来北海道酪農学園関係施設の教授や、講師をつとめ、昭和三十年には酪農学園の理事にもなり、懇請されるまゝに経営方面にも手腕を発揮しながら活躍を続けた。

陽一はかねて、デンマークの愛国者にして牧師の「グルンドビー」を尊敬し、又グ翁の伝記を書いたが、考えてみると、グ翁と出納陽一は多くの点で共通するものがあったように思う。

陽一が敗戦日本を憂い、酪農によって祖国の復興をはからんとした情熱は、グ翁が祖国デンマークを愛し、復興に情熱を傾けたことにも似ている。グ翁は牧師、陽一は熱心なクリスチャンで、共に信仰に生き、祖国を愛し、土を愛し、隣人と青年を愛したことも同じであった。

グ翁が生涯ただ一度も、派手な国際的行事に出席したことが無かったと同様に、陽一もまたそのような晴れがましいことを好まない性格であった。

陽一は性格極めて明朗で、真面目で、生涯を通じて動かすことのできない信念は、三愛主義を以て、真の人造

りをすることであった。陽一は常にグ翁の偉業と、グ翁の遺された美しい詩の数々を、若い学生に話して聞かせた。

弥生の片田舎に生れ育ち、日本酪農界の先覚者、又先駆者として美しく生き続けた陽一は、昭和五十一年五月十五日、八十七才の天寿を完うして、その偉大な生涯を閉じた。

出納陽一の人柄はまことに立派であった。その人となりを偲ぶために、三森千寿子さんの「父の想い出」の一節を紹介して結びとしよう。

父は音痴だったように思うが讃美歌は上手だった。信仰に生きている人の祈りにも似た厳かな雰囲気を醸し出して、その讃美歌が私の心に響いた。父の太い腕にぶら下りながら行った北光教会の壮厳な祈りが思い出される。いつの頃からか、私の神様は雲に乗って見守っていて下さると信じてきた。私の信仰の基礎を造ってくれたのは父母である。

父は「人間三十までの悩みは悩みの中に入らない。三十過ぎての悩みは信仰がなくては立ち直れない」と。

それから五年たって、三森が入院した。小豆大の軟骨腫ながらみけんに近く、切除手術のむづかしさに加えて再発の可能性を考えると、三歳の幼児を連れて私の心境は大変なものであった。そのような状態の時、懐かしい父の筆跡の封筒を受け取った。それは小さな聖書で、サイン入りのそれを抱きしめて後悔と感謝の涙にくれたものである。そのようなことがあってから、この言葉を一層大事にしながら三十代になり、四十代に入った、と。

本稿をしたためるに当って、上浦町山本正直氏より資料の提供をいただいた。厚く謝意を表する次第である。

大分の雨乞

高原三一郎　著

大分市舞鶴町一―七―一五
A5判三六五頁実費二五〇〇円送料三百円

さきに「大分の神々」「大分の鳥居」を出版された賛助会員の著者が古稀記念として出版されたもの。

第一章雨乞の歴史では日本のみでなく広く東亜各地の歴史をさぐり、第二章雨乞の習俗には一九四頁を費して雨乞の種々相を、第三章は雨乞の周辺を。すたれ行く雨乞の貴重な研究書である。